教科書文庫
4
160
30-1941
2000302822

國民禮法

初等科第四學年

43251
教科書文庫
4
160
30-1941
20003
02822

教科書文庫
4
160
30-1941
2000302822

國民禮法

初等科第四學年

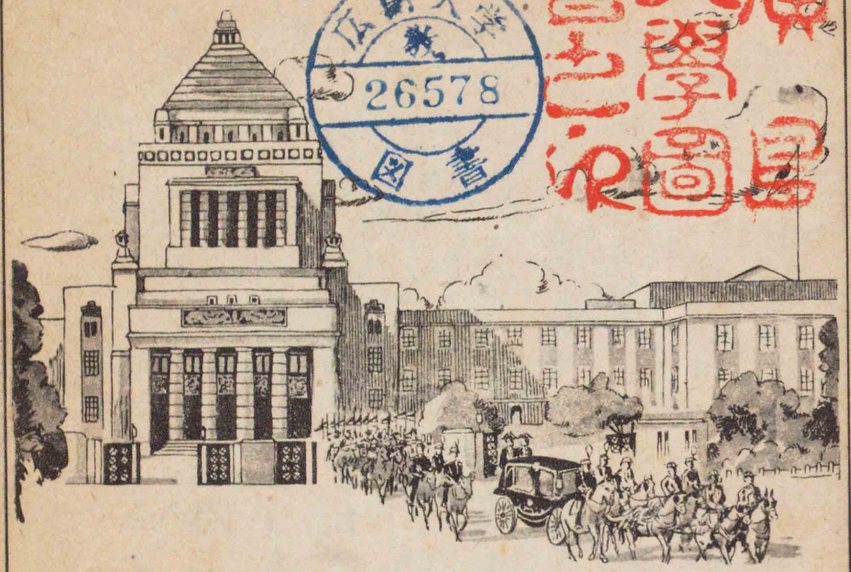
広島大学図書
2000302822

中央図書館
資料室
395.9
Re 9

もくろく

第一　行幸・還幸・行啓・還啓……一
第二　皇室……二
第三　神社の參拜……四
第四　燒香と玉ぐし……六
第五　きりつたゞしい生活……八
第六　しせい……十
第七　まじめな心がけ……十二
第八　すわり方と立ち方……十三
第九　戸・しやうじのあけたて……十四
第十　物の進め方・受け方……十六
第十一　集會の心え……十八
第十二　公衆に對する心え……二十
第十三　お客遊び……二十二
第十四　行幸啓を拜し奉る禮法……二十五
第十五　國歌に對する禮法……二十七
第十六　言語應對の心え……二十九
第十七　手紙の書き方……三十二
第十八　家のしきたりと先祖の祭……三十四

廣島大學圖書之印
廣島大學 26578 圖書



第一　行幸・還幸・行啓・還啓

天皇陛下のお出ましを行幸と申し上げ、皇后・皇太后・太皇太后陛下並びに皇太子殿下のお出ましを行啓と申し上げます。

天皇陛下のおかへりは、還幸・還御などと申し上げ、三后及び皇太子殿下のおかへりは還啓と申し上げます。

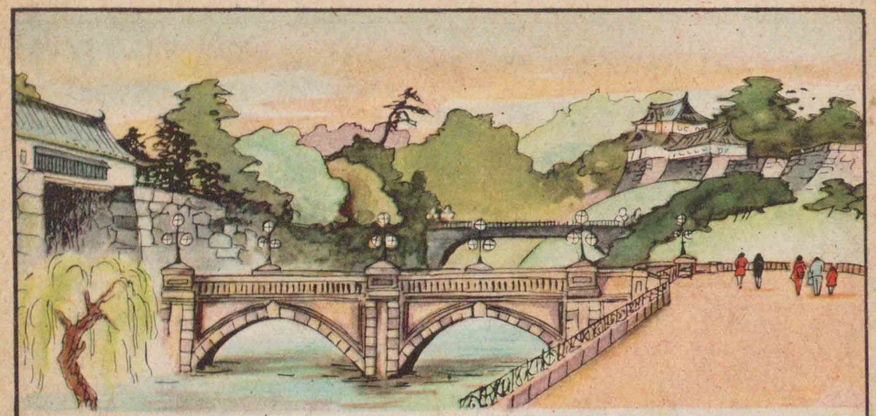
第二　皇室

我々國民は、せんぞから今日にいたるまで、ひじやうに長い間、皇室の御恩をかうむつて來ました。

上に御恵ふかい　皇室をいたゞき、うるはしい日本の國に生まれた私たちは、何といふ仕合はせなことでせう。我國民は、この山よりも高く、海よりも深い御恩をひとときたりとも忘れてはなりません。

一、天皇陛下・皇后陛下のおしやしんは、最もていねいに取りあつかひ、けつして不敬にならぬやうにちゆういしなければなりません。

東京大學圖書之印



二、皇室に關するおしやしんや事がらが、新聞やざつしに出てゐた時は、ていねいに取りあつかひ、不敬にならぬやう氣をつけませう。

三、皇室に關するお話には、「陛下」「殿下」などのうやまひことばをつけて申し上げます。そして、「陛下はまことに御健康でいらせられます。」「靖國神社に行幸遊ばされました。」などとうやまひことばを用ひ、たいども氣をつけて申し上げ、不敬にならぬや

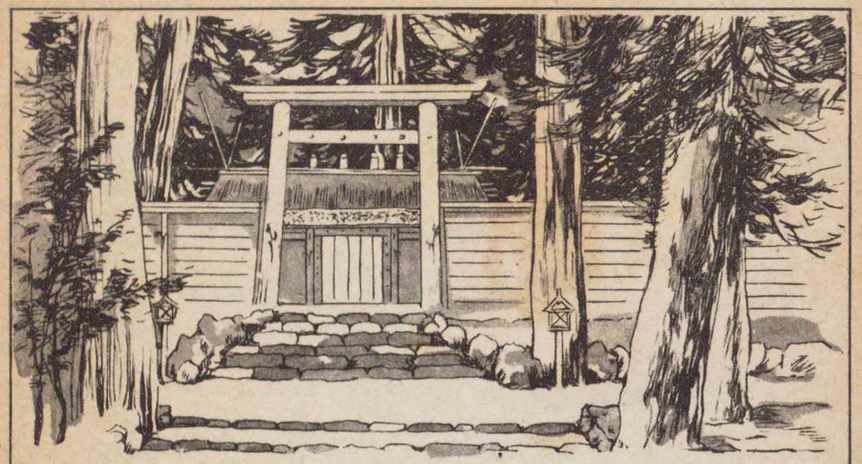
う十分ちゆういしませう。

第三　神社の參拜

我が國の神社には、我が　皇祖皇宗の尊いお方や、國家にてがらのあつた人々がおまつりしてあります。ですから、國民は誰でも、神社にたいして、尊びうやまふ心を持たなければなりません。

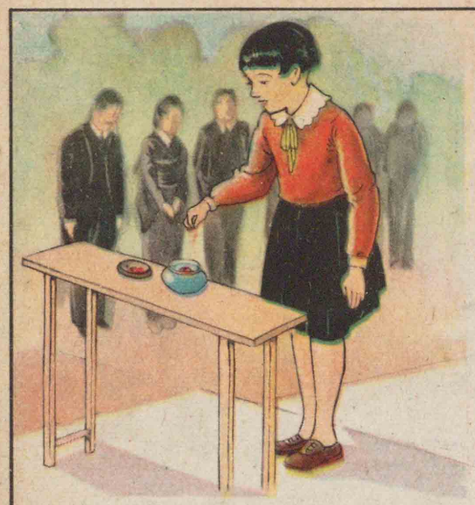
神社の前を通る時は、必ず敬禮をすることにしませう。

神前で拜禮する時は、先づ手をきよめてから、靜かに神前に進み、敬禮するのですが、なるべくかしは手の禮をしませう。



かしは手の禮をするには、先づ手をきよめ、靜かに神前に進んで敬禮し、更に少し進んでたゞしく立ち、うやうやしく二回拜禮し、それから二回手をうち、又一度拜禮してさらに一二歩さがつて、敬禮して退くのです。

かしは手は、落ちついて、よい音をたてるやうにしませう。それには、指をよくそろへ、手のひらを合はせたら、少しくぼめるやうにして、右の手を少し手前にずらすとよいのです。

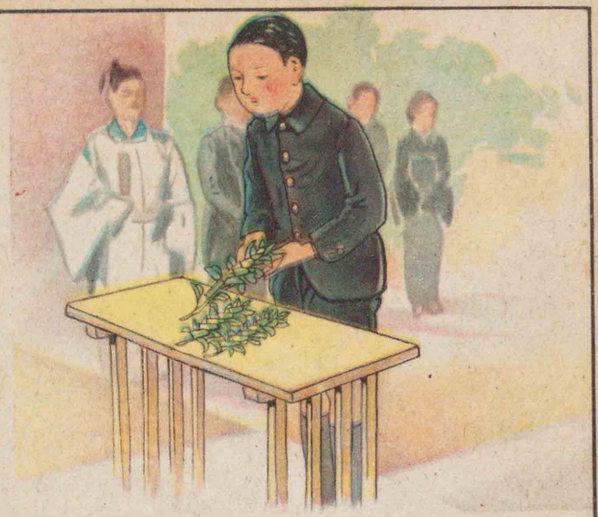


第四　焼香と玉ぐし

一、御不幸のあつた場合には、高い聲で話をしたり、笑つたりするものではありません。先方の氣持になつて、つゝしみ深くすることが大切であります。

二、戰死者のおさう式やゐれいさいなどの場合には、つとめて靜かにし、式がすんであいさつがあつてから靜かに出ます。

三、おさう式にのぞんだ者は、往復の途中、人の家をたづねたり、寄



席や劇場のやうな所に立ちよるものではありません。

四、焼香する時は、佛前に進んで一禮し、更に三歩進んで右手で香をつまみ、おしいたゞいて香爐の中に入れ、手を合はせて拜みます。それから靜かにさがり喪主と導師に一禮します。

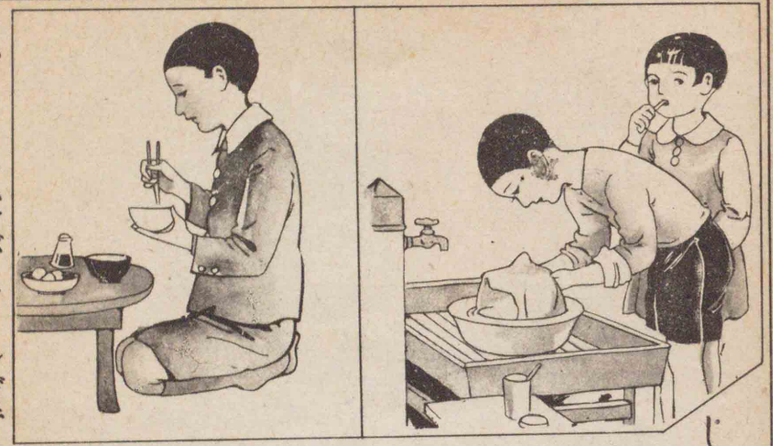
五、玉ぐしをさゝげる時は、先づ玉ぐしを受け、ひつぎに向かつて一禮して三歩進み、玉ぐしを持ちかへ、もとをひつぎの方に向けてさゝげます。さゝげたならば、そこで

再拜して靜かに二度かしは手(音をたてぬやう)をし、一禮してさがり、齋主と神主に一禮します。

第五　きりつたゞしい生活

私たちはいろいろのことで、すべてのことに時間をきめて、これを守ることの出來ないこともありませうが、毎日きりつたゞしい生活をすることが大切であります。

朝は、なるべく早く起き、着物を着かへ、戸しやうじ窓などをあけ、ふとんなどをかたづけ、すぐに顔を洗ひ、(女はかみをとゝのへ)神様やほとけ様を拜んで、おとうさんやおかあさんなどにあいさつをし、きまつた時間に食事をすま



し、それから、自分の仕事にとりかゝるやうにしませう。

又夜は、ねる時をきめ、ねる前には、その日の事をとゝのへ、はをみがき、身のまはりの物をかたづけ、おとうさんやおかあさんなどにあいさつしてからやすみます。ねてからは、みだりに話をしたり、人のねむりをさまたげたりしないやうにしませう。

つねにきりつたゞしい生活をするやうに心がければ、それがならはしとなつて、氣持のよい

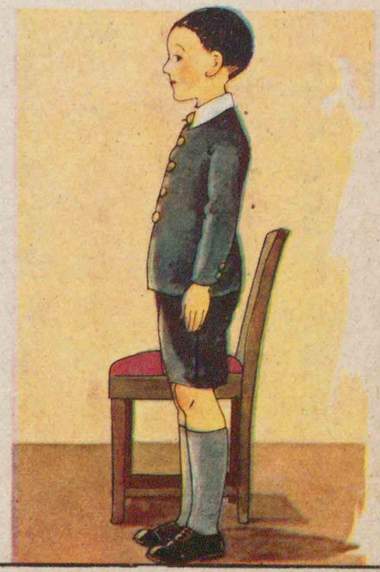
生活をすることが出來るやうになります。

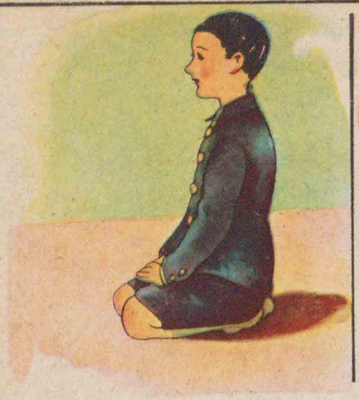
第六　しせい

よいしせい、たゞしい樣子は、上ひんに見えるとともに、健康の上にも大切であります。

一、立つたしせい

まつすぐに立つたしせいは、しぜんでのびやかに、すらりとしたのがよいのです。先づ兩方のかゝとをつけて、つまさきを開きます。胴體をたゞしくすゑたら、くびすぢをのばし、肩を平にし、胸をしぜんにはり、目は前方を





見て、口はむすびます。

二、腰かけたしせい

目や胴體は、立つたしせいと同じでよいのです。腰を深くかけて、足はゆかの上にそろへ、兩手はもゝの上におくか、又は輕くくみます。この時、いすにもたれぬやうに氣をつけます。

三、すわつたしせい

上體をまつすぐにたもち、兩足のおやゆびを重ね、上體をしぜんにのばすやうに、腰をたゞしくすゑます。さうして兩手は腰かけ

た時と同じやうにし、ひぢをはらぬやうにします。

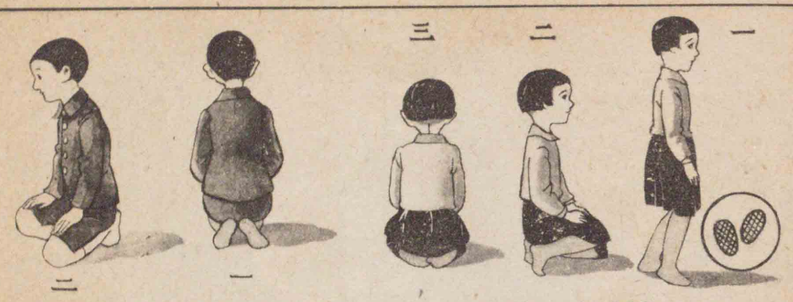
第七　まじめな心がけ

一、我々は應擧のやうに人から忠告を受けた時は、喜んでこれを聞きわるいところはなほしませう。

二、物事にうたがひがあつたら、はづかしがらずに、どんな人にでも聞きたゞすことが大切であります。

三、人が見ない所でも、自分の仕事は自分の力さうおうに氣のすむまでやり、けつしてなまけてはなりません。

四、仕事がりつぱに出來上つても、その後で、手落がありはしないかと、よくしらべてみることが大切であります。



第八　すわり方と立ち方

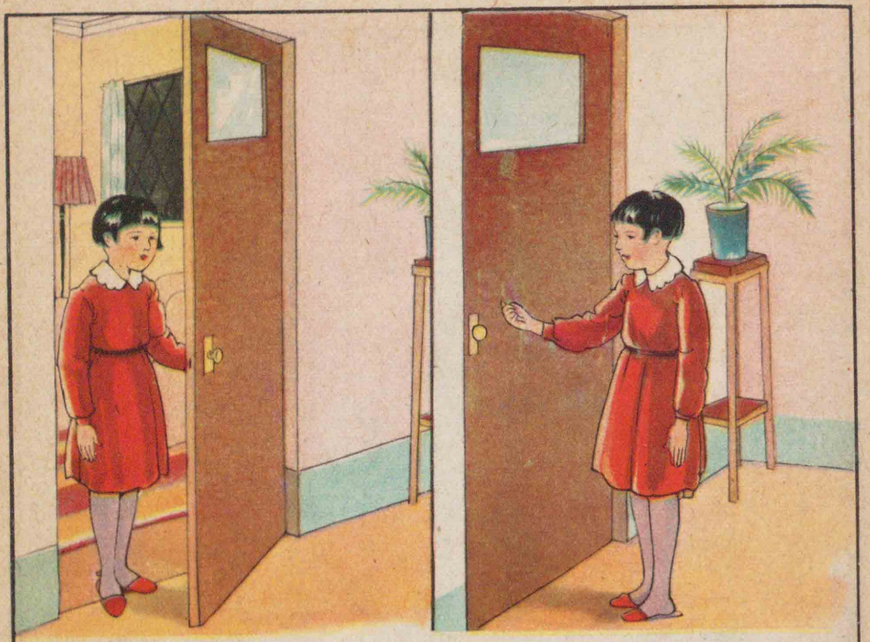
一、すわり方は、兩手を兩足の前にたれ、體をただしくのばし、左の足を少し引き、靜かにそのひざをつき、次に右ひざをつくと同時に兩ひざをそろへ、足のおやゆびを重ねて、靜かに腰をおちつけます。

一、立ち方は、兩手をひざの上におき、靜かに腰をうかして兩足をつま立て、右又は左の足を少し前に出し、體をまげないやうにして立上り、後の足を前に引きよせます。

第九　戸・しやうじのあけたて

戸・しやうじ・ふすまのあけたては、音をたてぬやう、静かにすることが大切です。左にあけるには、左手を引手にかけて少しあけ、次に右手でおしあけてはいります。これを閉ぢるには、向きなほつて左手で下の方を持つて引きよせ、右手を引手にかけて静かにたゞしくしめるのです。

右にあけたてするには、これとはんたいにします。



西洋式のへやにはいる場合には、ノックして、内から返事のあるのを待たねばなりません。

ドアのあけたては、右開きの時は、右手でとつ手を持つてあけ、内にはいつたら、左手に持ちかへて、静かにしめませう。

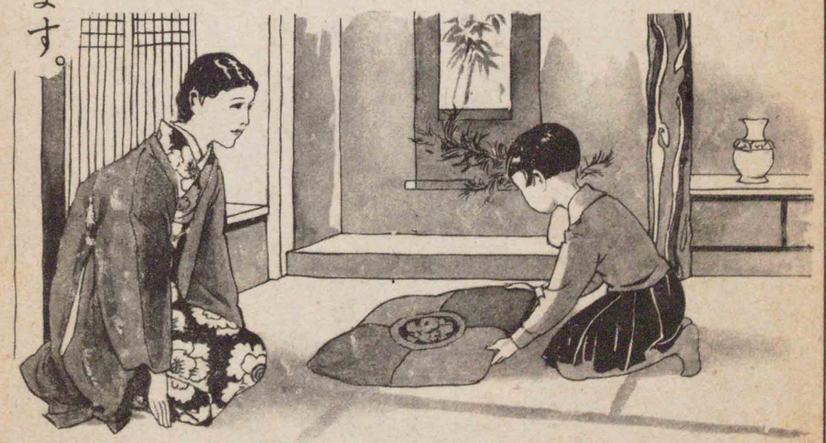
もし左開きの時には、これとはんたいにします。

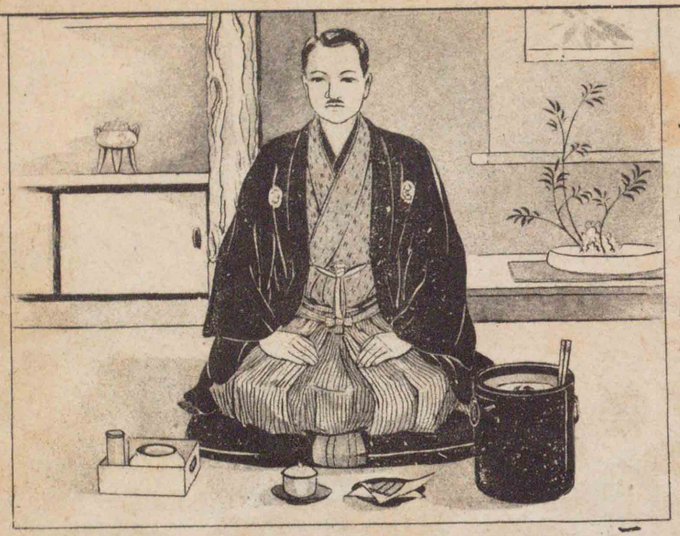
第十　物の進め方受け方

一、ざぶとんの進め方受け方

ざぶとんを進める時は、左手で下からさゝへ、右手をざぶとんの右はしにそへて持ち、客の前にすわつて、上座の方に進めて一禮いたします。

ざぶとんを進められたら、兩手をひざの兩がはにつき、一禮してひざを進め、たゞしくすわります。



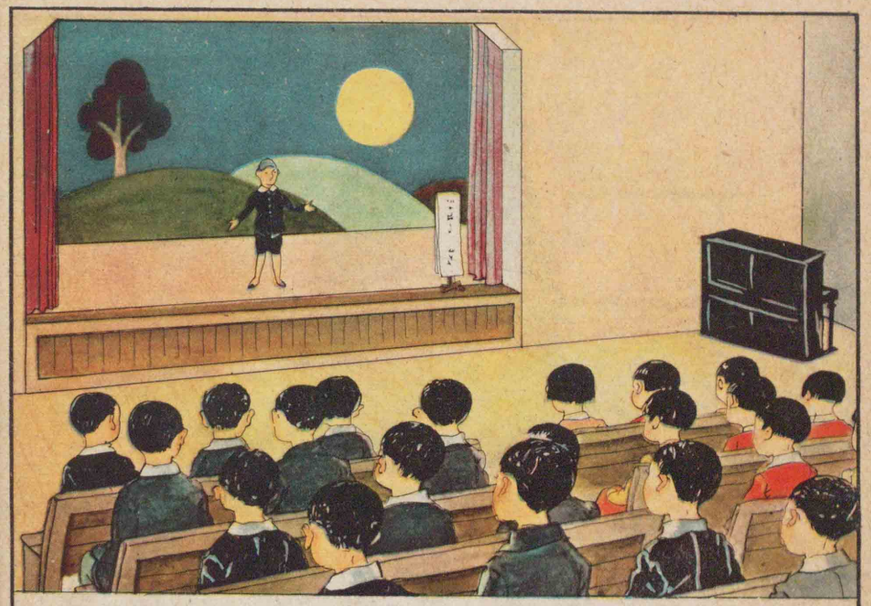


ざぶとんをかつてに引寄せてしくのはよくありません。

二、たばこぼん火鉢の進め方

たばこぼんは、火入れは客の左の方に、はひ吹きは右の方になるやうにして持つて行き客の用ひよい所に進めます。

火鉢を進める時は、手かけのあるものは、手かけが左右になるやうに進めます。さうして、たばこぼんは、客の右がはに、火鉢は客の左がはになるやうに置くものです。



第十一　集會の心え

學藝會や、おとぎ會のやうな集會の場合には、次の事に氣をつけませう。

一、きまつた時こくにおくれぬこと。しかしあまり早く行きすぎぬこと。

二、出席した時は、かゝりの人のさしづにしたがふこと。

三、會場へ出入する時は、年寄や小さな子供は先にすること。

四、席につく時と、席をはなれる時は、となりの人にゑしやくをすること。

五、一人で廣い場所をとらぬやう、氣をつけること。

六、お話や學藝のさい中に、席を立たぬこと。

七、やむをえず席をはなれる時には、話の切れ目や學藝のかはり目などを見て、人にめいわくをかけぬやうにすること。

八、さゝやき話をしたり、高い聲で話し合つたりせぬこと。

九、閉會のあいさつがすむまで會場から出ないこと。閉會のまぎはに出るのは失禮であります。

第十二　公衆に對する心え

圖書館や劇場など、大ぜい人の集る所で、時々無作法な人を見ることがありますが、まことに困つたものだと思ひます。

又道路をよごしたり、交通のじやまをして、平氣でゐる人がありますが、まことにはづかしい事です。

一、道路や共同便所は、何時もきれいにしてよごさぬやうにすることが大切です。外國では、町のはづれに靴洗をそなへて、道路をよごさぬやうにしてゐるといふ事です。紙くづを散らしたり、らく書したり、たんやつばなどをはいたりしないやうに氣をつけませう。

二、公會堂や圖書館などでは、きそくをよく守りませう。

飲み食ひは、きまつた場所ですること。

机や本などは、ていねいに取りあつかふこと。

大聲をあげず、行儀よくすること。

三、公園では、木の枝や草花を折取つてはなりません。

ベンチを何時までも一人じめにしてゐたり、運動具をらんぼうに取りあつかつたりしてはなりません。

四、劇場などで、きつぷを買つたり、下足を取つたりする時には、人をおしのけたり、人の間にわりこんで人にめいわくをかけたりしないやうにしませう。

第十三　お客遊び

松子「さあ、どうぞおしき下さいませ。」

花子　ゐしやくしてざぶとんをしく。

松子「どうぞ、召上つて下さいませ。」

と、茶をすゝめる。

花子「ありがたうございます。」といひながら、ゐしやくして、右手で茶(ちや)わんを取上げ、左手を下にそへて静かに飲(の)む。すゝる音や、飲みこむ音などしてはいけません。

飲終つたら、静かに茶わんを茶たくの上に置く。

松子　おぜんにごちそうを持つて來て、花子の前に置き、静かに前に少しおし進める。

花子　ゐしやくする。

松子「まことにお粗末ですが、どうぞ召上つて下さいませ。」

花子「ありがたうございます。」とゐしやくし、「いたゞきます。」といつて、右手をわんにそへ、飯わんのふたを左手で取つて、おぜんの左がはの下に置き、次に右手で汁わんのふたを取つて、おぜんの右がはの下に置き、静かにたべる。

松子「おかはりをどうぞ。」といつておぼんを出す。

花子　はしをおいて、両手でおわんを出す。

松子　ごはんをもつておぼんにのせて出す。

花子　兩手でおわんを取つて、一度おぜんの上に置き、又取上げてたべる。

松子　おぼんを出して「おかはりをお出し下さい。」

花子「十ぶんいたゞきました。お茶をいたゞきませう。」

松子「あまりお輕うございました。それでは。」といつて、お茶をついで出す。

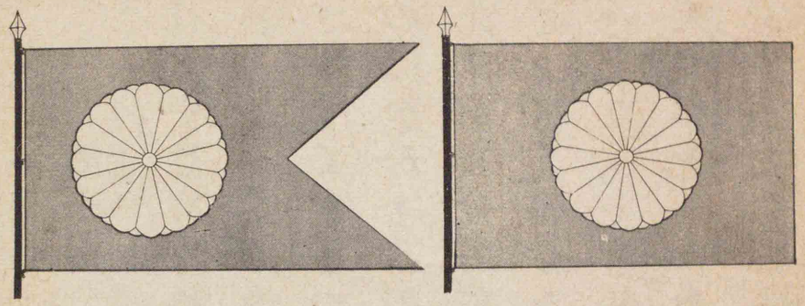
花子　お茶を飲終つて、おわんのふたを元の通りにし、「ごちそうさまでございました。」とゑしやくをする。

松子「おそまつさまでございました。」と、ゑしやくをし、おぜんをさげる。

第十四　行幸啓を拜し奉る禮法

行幸や行啓を拜し奉る時は、前もつて體をきよめ、衣服をとゝのへて、不敬にならぬやう氣をつけねばなりません。さうして、きまつた場所にたゞしく並んで、憲兵や巡査、そのほかかゝりの人のさしづにしたがはねばなりません。先乘が自分の前に見えたら、外たうやえりまき、肩かけなどをとり、帽子をとつて、かたちをきちんととゝのへ、しせいをたゞしてお待ち申します。

天皇旗を拜し奉り、菊の御もんのついた御車が自分の前をお通りになる時は、つゝしんで目をそゝぎ、最敬禮をし

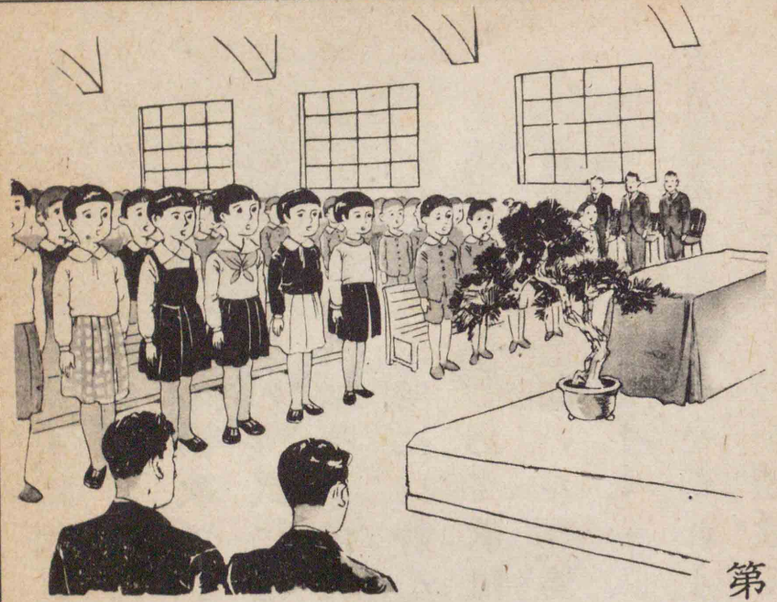


ます。

そのほかの皇族の場合も、これにならつてていねいな敬禮をします。

行幸や行啓を拜し奉るには、行列の始めから終りまで靜かにし、特にお許しのないかぎりは、萬歳をとなへることはつゝしまなければなりません。

行幸啓を、高い所や、塀ごし又は窓から拜したり、指さしなどしたりしてはなりません。



第十五　國歌に對する禮法

君が代は
千代に八千代に
さゞれ石の
いはほとなりて
こけのむすまで

今紀元節の儀式が始つて、君が代を歌ふ聲が、講堂からおごそかに聞えて來ます。

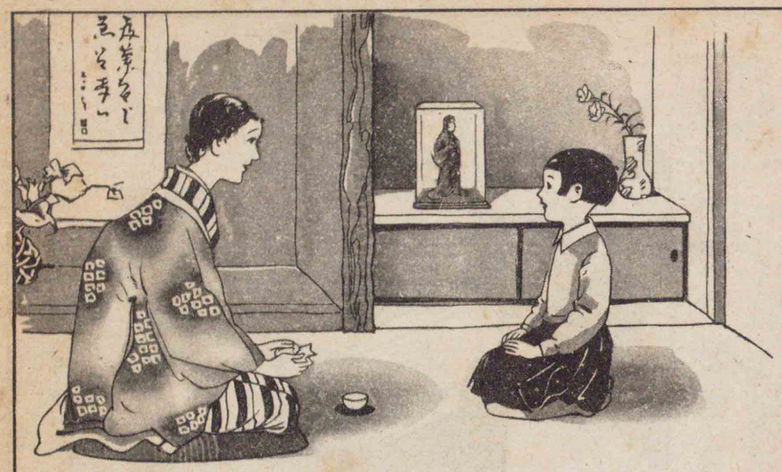
世界のどこの國にも、國歌といふものがあつて、國民はその國の大切な儀式などの時に、これを歌ひます。

「君が代」は、我が國の國歌でありますから、祝日やそのほかのおめでたい日の儀式には、私たちは、君が代を歌つて、天皇陛下の御代萬歲をお祝ひ申し上げます。

一、「君が代」を歌ふ時には、靜かに立つてしせいをたゞしくして、まごころこめて歌はなければなりません。

二、人が歌ふのを聞いたり、奏樂だけを聞いたりする時も同じことであります。

三、外國の國歌が奏せられる時にも、立つてしせいをたゞしくして聞くのが禮儀であります。

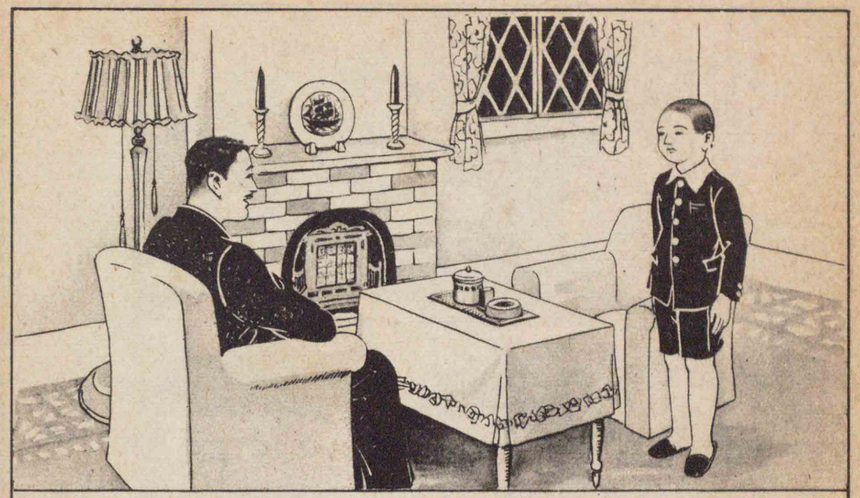


第十六　言語應對の心え

一、人は、言葉づかひで其の人がらがわかります。それゆゑ、言葉づかひはていねいに、はつきりすることが大切であります。

ぞんざいな言葉づかひやぐづぐづした言ひ方は、人に不愉快な感じをあたへるものですから、注意しなければなりません。

二、人の名前を呼ぶ時には、大山君



の兄さん、小川さんのおねえ様などと、さうたうのうやまひことばを用ひますが、人に對して自分の家族・親戚のものをさして語る場合には、様やさんはつけないで、「私の父が」とか「大阪のをぢが」とか「兄は一中の二年生です。」とかいひます。

三、テーブル・いすなどのある所で話す場合には、先方が立つたままであつたら自分も立ち、先方

が腰かけたまゝであつたら腰かけるのがふつうであります。この時先方が目上である場合は、いすを進められた場合の外は、腰をかけないのが禮であります。

四、座敷で對話する場合は、先方がすわつたまゝであつたら、自分も必ずすわつて應對するのです。

五、先方が用事又はお話中であつたら、其の終るのをまつて話しかけるのが禮です。しかし急用の場合は、忘しやくして、「お話中失禮ですが、」とか「御用中失禮ですが、」とかいつて話しかけるのです。

六、先方のお話はよく聞かねばなりません。自分ばかり話をするのはよくありません。又人が對話してゐる時に、

差出口をしてはなりません。

七、道のまん中で立ち話するのはよくありません。もし立ち話をしなければならぬ時は、道のわきによけて、人のじやまにならぬやうにします。

第十七　手紙の書き方

手紙は、先方とあつて話をするかはりに、用むきを書いて送るものでありますから、なるべくまごころをこめ、初めから終りまで、文字の大きさ、すみの色、字體、書きぶりなども注意して書き、書終つたら、讀みかへして間違ひのないやうに氣をつけなければなりません。

郵便はがき

東京市四谷區
内藤町一丁目五番地
日本太郎君

小石川區原町二番地
大和一雄

前略
みなさまには　お變りありませんか。僕達一家みな元氣でおりますから御安心下さい。
さて、この十五日の日曜日に兄さん達と箱根へハイキングに行きます
太郎君もよろしかつたら行きませんか
おさそひします　雨でしたらやめます
御返事を待つております
みなさまに　よろしく
草々

一、讀みにくい手紙を書かぬこと。

二、大切なことははつきり書くこと。

三、文字はていねいに書くこと。

四、文のすぢがよくわかるやうに書くこと。

五、文字の大きさ、すみの色などに氣をつけること。

六、葉書にはなるべく用むきだけをかんたんに書くこと。

第十八　家のしきたりと先祖の祭

私どもの今日あるのは、先祖のたまものです。先祖の定められた家のしきたりは、これを重んじて實さいに行ひませう。新年・節句・祭日・祝日など、家によつてちがつた仕方があるのは、先祖ののこした家風です。私どもの家には、皆神だながあり、佛だんがあるのがふつうです。我々は家々の家風によつて、朝晩、或は時を定めて禮拜し、先祖の御恩を忘れぬやうにしなければなりません。特に先祖の命日には、家の内外をきよめて、物を供へ、しんるゐの人々を招いてお祭し、ながく先祖をしたふやうにしませう。　終

コドモノシツケ
國民禮法
初等一年・初等二年
初等三年・初等四年
初等五年・初等六年
定價各册　十二錢

昭和十六年四月一日印刷
昭和十六年四月五日發行

教育會
檢定濟

著作者　禮法教育研究會
發行者　東京市神田區一ツ橋二丁目九番地　大橋貞雄
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　共同印刷株式會社
印刷者

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目九番地
帝國教育會出版部
電話九段(33)四一五一番至四一五五番
振替口座東京六八二八六番

初等科四年

土井スミ子

広島大学図書
2000302822